

エックハルト、全56篇の

ラテン語説教についての若干の考察

中 山 善 樹

1

エックハルトの批判的校訂版全集ラテン語著作集の第IV巻には、全56篇のラテン語説教が収録されている⁽¹⁾。それらはそのテキストの編纂者J・コッホによれば、その考察の多面性、その思想の深さ、その比喩の大胆さ、その言葉の豊かによって驚嘆すべきものであり⁽²⁾、それらは時として「思惟の歩みの未曾有の高揚」⁽³⁾を将来させる類のものであった。しかしそれらはまた、本来のラテン語説教の草稿であり、トルソーでもあった。もしそれらが完成していたら、現存の全著作のなかで最も完成度の高い、卓越した作品である『ヨハネ福音書註解』(*Expositio sancti Evangelii secundum Iohannem*)をも凌駕するであろうと言う⁽⁴⁾。

しかし現存の56篇のラテン語説教が彼の書いたすべてのラテン語説教かということには、疑問の余地がある。『ヨハネ福音書註解』の本文とタブラには、「この書の最後にある説教」(*sermo in fine libri*)がこの聖句を扱っているという意味の言句がいくつか出てくる。そして実際、それらの聖句のいくつかは、現存のラテン語説教のうちに見出さ

れるのである⁵⁾。しかし反対に、現存のラテン語説教のうちには見出されない聖句も存在する⁶⁾。このことから推察されることは、現存のラテン語説教はエックハルトの書いたすべてのラテン語説教ではないということである。すでに伝承の過程で失われた説教もあると思われる。この意味でも、現存のラテン語説教はコッホの言うようにトルソーである⁷⁾。しかし、これらのことを正確に理解するためには、はじめに現存のラテン語説教がエックハルトの全著作のうちで占める位置を確認しておくなくてはならない。

2

すでに他でも述べたように、現存のラテン語著作のうちの主要な作品は、未完の大作『三部作』(*Opus tripartitum*)の一部であると見なされている。『三部作』は「序文」(*Prologi*)、¹⁾「提題集」(*Opus propositionum*)、²⁾「問題集」(*Opus questionum*)、³⁾「註解集」(*Opus expositionum*)から成り、そのうち「註解集」は本来の「註解」(*Expositiones*)と「ラテン語説教集」(*Opus sermonum*)から成立していた。現存のラテン語著作のうち「三部作全般的序文」(*Prologus generis in opus tripartitum*)、⁴⁾「提題集序文」(*Prologus in opus propositionum*)、⁵⁾「註解集序文」(*Prologus in opus expositionum*)は、その「序文」にあたり、⁶⁾『創世記註解』(*Expositio libri Genesis*)、⁷⁾『創世記比喩解』(*Liber parabolarum Genesis*)、⁸⁾『出エジプト記註解』(*Expositio libri Exodi*)、⁹⁾『知恵の書註解』(*Expositio libri Sapientiae*)、¹⁰⁾『ヨハネ福音書註解』、¹¹⁾『雅歌註解』(断片) (*Expositio Cantici Canticorum*)、¹²⁾それにコッホによると¹³⁾『シラ書24章についての説教と講解』(*Sermones et Lectiones super Ecclesiastici c. 24*)は、その「註解集」にあたるが、「提題集」と「問題集」については、それに属する作品は伝承されてきておらず、僅かに「三部作全般的序文」にそのあらましの形態が素描さ

れているにすぎない。『パリ討論集』(Quaestiones Parisienses)については、一般に、その「問題集」に属するものではないとされている。他の二つのラテン語説教、『一二九四年の復活祭にパリで行われた説教』(Sermo Paschalis a. 1294 Parisius habitus)、『聖アウグスティヌスの祝日にパリで行われた説教』(Sermo die b. Augustini Parisius habitus)は、エックハルトの若年時代に行われたものであり、『三部作』に属するものではないとされている。その他にも、エックハルトの著作のなかには、『ローマ書註解』をはじめ、多くの作品が完成されたものとして記述されているが、これらについても、そもそも現存しなかったと見る研究者もいるが⁹⁾、エックハルトが異端とされたことから、伝承の過程で失われたと考えるほうが妥当だろう。

さてここで問題なのは、全56篇のラテン語説教がその「説教集」にあたるものであるかどうかである。コッホは特に立ち入った議論もすることもなく、おそらくそれらが草稿にすぎないことから、「説教集」に属するという見解には否定的である¹⁰⁾。しかし著名なエックハルト研究者であるK・ルーは、それらは草稿ではあるが、「説教集」に属すると考える。ルーによれば、ラテン語説教の伝承においては、それは通常のことであるという¹¹⁾。そもそもエックハルトにとつては、『ヨハネ福音書註解』のタブラにも書かれているように、一つの聖句を二つの様態、すなわち註解の様態と説教の様態で解釈することが重要であった¹²⁾。そこから「註解集」が本来の「註解」とラテン語説教集」に分かたれることになったと考えるのは自然であろう。事実、『ヨハネ福音書註解』に出てくる聖句は「その書の最後にある説教」においても取り上げられているのである¹³⁾。したがってわれわれはルーと同じく、これらのラテン語説教は『三部作』の「ラテン語説教集」に属するものだと考える。

それでは、これらのラテン語説教の執筆時期はいつ頃であろうか。このことについては、現在までのところ確定的なことは何も言われていない。しかしわれわれの見るところ、いくつかがかりがある。一つはやはり『ヨハネ福音書註解』の本文とタブラにある。ここでは明確に、「この書の最後にある説教」に、しかしかの聖句は論じられている旨、述べられているからである。

このことは、これらのラテン語説教が『ヨハネ福音書註解』の前に、たとえ草稿であるにせよ、存在していたことを示す。前論⁽⁴⁾で詳述したように、『ヨハネ福音書註解』はその本文のうちに「聖トマス」(sanctus Thomas)⁽⁵⁾という表現を含んでおり、トマスが列聖されたのは、一三二三年のことであり、この年はエックハルトは、かつて自分が学んだケルンのドミニコ会神学大学の学頭に就任した年であった。したがって『ヨハネ福音書註解』は、少なくともその一部は、エックハルトの晩年のケルン時代に執筆されたものであることが判る。

しかし注目すべきことに、エックハルトのラテン語説教にも、「聖トマス」という表現が見出される⁽⁶⁾。このことは、少なくともそれらの一部はやはり、ケルン時代に書かれたものであるということを示している。これらのラテン語説教がドイツ語説教とは異なり、一般在俗信徒を相手にしたものではなく、学僧を対象としてのものであり、いわゆる「大学説教」(akademische Predigten)であることも、そのことを裏付けるものであろう。当時、神学教授の主要な任務は、聖書を講解し、討論を主宰し、ラテン語の説教を行うことであつたからである。

以上から明らかなのは、これらのラテン語説教も『ヨハネ福音書註解』も、少なくともその一部は、ケルン時代

に書かれたものであり、ラテン語説教は『ヨハネ福音書註解』に先立って存在していたということである。エックハルトは一三二八年には、当時教皇庁のあったアヴィニオンで亡くなっているから、上記の二つの作品はエックハルトの晩年の作であると言ってよいだろう。またこのことから、これらのラテン語説教がトルソーに終わつたことも説明されるのである。また、これらのラテン語説教のうちには、エックハルト思想の最終的な根本的モチーフである「靈魂における神の(子)の誕生」(*partus dei in anima*)という用語が、唯一ラテン語著作のうちで見出されるが⁴⁾、このこともこれらの説教がエックハルトの思想の最終的形態を表していることと見ることができよう。

4

それでは、これらのラテン語説教において内容的に注目されるのは何だろうか。私はそれは「愛」の概念だと思ふ。周知のように、キリスト教的諸徳のうちで「愛」は卓越した位置を占めており、エックハルトもさまざまな著作で詳細に論じている。ここでは、エックハルトが「愛」(*amor, dilectio, caritas*)の概念についてそのラテン語説教においてどのように説いているかを簡潔に振り返ることにしたい。

ところでエックハルトの「愛」の概念が最も詳細に論じられているのは、第40番目に編入されている「三位一体の祝日の後の第18の主日において」(*Dominica octava decima post Trinitatem*)と題されている説教においてである。ここでは、エックハルトはマタイ福音書から二つの聖句を選んで、それらに依拠しつつ論じている。それらはまず第一に、「あなたは主であるあなたの神をあなたの心を尽くして愛さなくてはならない」(22・37)であり、第二に、「あなたはあなたの隣人をあなた自身と同じように愛さなくてはならない」(22・39)である。

それでは、エックハルトはまず神への愛をどのように説いているか。エックハルトによれば、愛とは、愛されるものへの「運動」(motus)であり、愛は愛されるものと一つになることを欲することである。したがって神への愛は神と一つになることを欲することである⁸⁸⁾。しかしまた、このことは「あなたが心を尽くして愛する」すべてのものは、あなたの神であり、神としてそのものを崇めていることを意味している。このような意味において聖書においては言われている。「彼らの神は腹である」(フィリ3・19)。ここでは、神への愛はけっして所与のものではなく、容易に転倒される可能性として把握されている。しかしそれにも拘わらず、このような「神への秩序」(ordo in deum)は、エックハルトによれば、すべてのものにおいて、善性の唯一の根拠である⁸⁹⁾。そして次に述べられる隣人への愛もこの「神への秩序」に基づいて初めて可能になることが、このことのうちにはすでに含意されている。

5

エックハルトは「あなたはあなたの隣人をあなた自身と同じように愛さなくてはならない」という聖句を解釈して次のように言う。ここでは愛の行為が命じられているのであるが、特にエックハルトが注目しているのは、愛の効用である。まず第一に、愛は靈魂に生命を与えることによって、死から靈魂を解放する⁹⁰⁾。第二に、愛は知性を照らすことによって、神的なものの観想と認識とを明るみにもたらし⁹¹⁾。第三に、愛は敵である悪魔を憎むことを可能にする⁹²⁾。このことの前提になっていることは、人間は愛なくしては、自然本性的には、悪への傾向性を持っているのであり、悪を憎むことはできないということである。第四に、愛は神と人を同化することによって、人を神の子にする⁹³⁾。人間は自然本性的には、愛なくしては、神の子になることはできない。

それでは、われわれは何を愛さなくてはならないのか。それは言うまでもなく「あなたの隣人を」ということである。それでは、どのようにあなたはあなたの隣人を愛さなくてはならないのか。それは私が私自身を神のうちでのみに愛するように、またわたしの隣人を神のうちでのみ真に愛さなくてはならないのである。もし私が隣人を自分自身と同様に愛しているならば、その場合には、私は彼の報い、功德、栄光について、私自身のそれらと同じだけ享受し、喜ぶことになる。それが隣人を自分自身と「同じだけ」(tamquam)愛するということに他ならない。それゆえに、隣人に属するすべてのものは、私にとつては自分自身のものであり、また共通のものである。隣人の災い、不幸、病気なども、私のそれらとして捉えなくてはならないのであるが、それはもはや罪としてではなく、功德としてである。それらが私にとつて神によつて意志されたものとして捉えられるならば、それらは私にとつては、もはや重荷ではなく、甘美なものとなるからである。

6

以上からすでに明らかかなように、愛は愛している人を自分の外に置き、彼によつて愛されている人のうちに移すことのように存するのであり、そのような「脱我」(exstasis)に他ならない⁴⁴⁾。それは、エックハルトにおいては、我執を滅却し、自分の外へと出て行くことである。愛の本質をそのような脱我のうちに見出したことは、エックハルトの愛の解釈の最も深遠な到達点である。したがってエックハルトによれば、真に愛する人は愛されるもの以外のいかなるものも求めることはない。したがって人が自分自身によつて愛されるもののうちにより少なく自分のものを求めるほど、それだけより真なる仕方でその人は愛されるものを愛することになる⁴⁵⁾。同様にして神を完全な仕方であす

る人はいかなる他のものもまったく愛することはなく、それゆえに、そのような人は、神の外なるすべての善を、それがいかなる徳であっても、ただただそのうちに彼がそのみを愛している神の似像が輝いているということからしてのみ愛するのである。そしてエックハルトによれば、もし人がそれと違う在り方をしていいるならば、その人は愛において完全ではない。というのは、完全な愛はいかなる貪欲も知らないからである⁸⁹。すなわち、最後に完全に我執を脱却した愛としての「神愛」(caritas)が語られるのであり、それは我執に根ざすいかなる貪欲とも無縁なものであると言われる。そういう意味で神愛は、エックハルトにおいては、愛のうちで最も高貴な愛として説かれている。そしてこの「神愛」の概念のうちに、エックハルトの倫理思想の一つの頂点を見出すことができるであろう。

註

- (1) 使用テキストは、Meister Eckhart, Die deutschen und lateinischen Werke, Die lateinischen Werke, Bd. III, *Expositio sancti Evangelii secundum Iohannem*, Stuttgart 1994; Bd. IV, *Sermones*, Stuttgart 1987. 略号は、前者は本文に「*In Ioh.*」、それ以外に「*Ser.*」、後者は本文に「*Ser.*」、それ以外に「*LW IV.*」
 (2) Vgl. LW III, S. XXI.
 (3) Vgl. LW IV, S. XXXVI.
 (4) Vgl. LW III, S. XXI.
 (5) 例として、LW III, S. 674 を参照。
 (6) Cf. *In Ioh.* n. 657.
 (7) LW III, S. XX.
 (8) Vgl. LW III, S. XVIII.
 (9) Cf. Loris Sturlese, *Meister Eckhart. Ein Portraet*, Regensburg 1993, S. 16.
 (10) Vgl. LW IV, S. XXIV.

- (11) Kurt Ruh, *Meister Eckhart. Theologe, Prediger, Mystiker*, Muenchen 1985, S. 74.
(12) *Vel. LW III*, S. 699.
(13) *Cf. In Ioh. n. 407.*
(14) 拙論「エックハルト『ヨハネ福音書註解』に対する若干の註釈の試み」、「文化学年報」第57号 pp. 95—103 参照。
(15) *Cf. In Ioh. n. 343.*
(16) *Cf. Ser. n. 34.*
(17) *Cf. Ser. n. 544.*
(18) *Cf. Ser. n. 389.*
(19) *Cf. Ser. n. 391.*
(20) *Cf. Ser. n. 393.*
(21) *Ibid.*
(22) *Ibid.*
(23) *Ibid.*
(24) *Cf. Ser. n. 398.* 「脱我」(exstasis) の概念については、エックハルトは偽ディオニシウスに負っている。*Cf. De div. nom. c. 4, 13.*
(25) *Cf. Ser. n. 399.*
(26) *Ibid.*